

技術哲学の可能性

— カッシーラ・三木・ハイデッガー —

稲田知己*

Die Möglichkeit der Technikphilosophie

— Cassirer・Miki・Heidegger —

Tomomi INADA

Da die Technik ein sowohl zentrales wie bedrängendes Problem unseres gesamten Lebens geworden ist, so ist sie damit auch Sache der Philosophie geworden, und in Wahrheit ist so etwas wie eine ‚Philosophie der Technik‘ konzipiert worden. In dieser Abhandlung geht es darum, die Möglichkeit der Technikphilosophie zu erörtern, die den Herausforderungen der modernen Technologien gerecht wird. Dazu wird geschichtlich auf die schon in den 30er Jahren behandelten technikphilosophischen Überlegungen von E. Cassirer, K. Miki, und M. Heidegger zurückgegangen.

Keywords. Technik, Philosophie der Technik, Engineering Ethics

はじめに

われわれを取り囲むすべてのものが、技術によって媒介されている。自動車やコンピュータをはじめとして、われわれの誕生から死にいたるまで、地球環境のすみずみまで、技術に関係していないものはまったくないといっている。だから、哲学がいまなお健在であるとしたら、〈技術哲学〉ないし〈技術の哲学〉が存在しなければならない。ハンス・ヨナスもいうように、「……技術は大地のうえで人間が存在するすべてにかかわる中心的かつ急迫的な問題なのだから、それゆえまた技術は哲学の事柄になったのであり、そうするとテクノロジーの哲学といったものが存在しなければならない」¹⁾。しかし、「なければならない」という要請は、むしろそうした哲学がいまだ存在しないこと、その存在がきわめて困難であることを暗示しているにち

がいない。

なるほど、今日、技術にかんするさまざまな学問がある。たとえば、技術社会学であるとか、工学倫理であるとか、科学技術社会論(STS)であるとか、社会科学的なテクノロジー・スタディーズは隆盛をほこっている。その影響を受けて、現代の技術哲学は経験論的転回を遂行しなければならない、と考えられるかもしれない。だが、諸技術の社会的事例の分析が哲学的省察をそれだけで豊かにするとは、かならずしもいえないだろう。わたしは本研究で〈技術哲学の可能性〉について論じたいのだが、その手がかりを哲学の歴史のうちに、じっさい 1930 年代に試行された「技術の哲学」のうちに探索してみたい。

技術の起源は科学より古く、人類の誕生とおなじくらい古い。周知のように、テクネー [=技術知] についての哲学的考察は古代ギリシャからあった。しかし、〈技術の哲学〉が書名として登場するのは、産業革命後、発達した技術による社会問題が顕在化した 19 世紀後半においてのことだった。エルンスト・カップの『技

原稿受付 平成 19 年 8 月 31 日

* 一般科目

術哲学綱要』(Grundlinie einer Philosophie der Technik, 1877)が、その最初の例とされる。そして20世紀初頭になると、多くの著名な哲学者が〈技術〉について主題的に論じはじめる。このころ書かれたカール・ヤスパースの『時代の精神的状況』によれば、「技術の時代における意識と機構の支配とは、人間を豊かにすることによって人間を息苦しくするように思われる」²⁾。ヤヌスのように二つの顔をもつ技術は、まさに時代の課題となった。

ここで検討しようとするのは、20世紀の哲学者のなかで卓抜な技術論を唱えたことで知られるマルティン・ハイデッガーと、かれと面識のあった2名の哲学者、すなわち、エルンスト・カッシーラーと三木清とである。カッシーラーとハイデッガーとは1929年にスイスのダヴォスで伝説的な公開討論をおこなった論敵であり、たがいに『シンボル形式の哲学』第2巻(1925)と『カントと形而上学の問題』(1929)という著作にたいして書評を書きもした。また、留学中の三木は1923年10月から24年8月まで、マールブルクに赴任したばかりのハイデッガーから教えを受けた。わたしが興味深いと思うのは、この3名がおおよそ1930年代から、それぞれ自分なりの仕方、〈技術〉を自分の哲学の主題としている事実である。そこには共通点もあれば相違点もあるだろう。このなかから〈技術哲学の可能性〉が浮かび上がってこないかどうか、以下の論考で検証したい。

1. カッシーラーの「形式と技術」

カッシーラーは『シンボル形式の哲学』第3巻(1929)を出版した直後に、「形式と技術」(1930)と題された論文を書いた。かれはこの冒頭で、「技術の優位」(C17, 139)という事実を承認する。「人間的文化の個々の領域が有する意義をはかる尺度がまず第一にその領域の現実的有効性に求められるとしたら、……われわれ現代文化の構築において技術が第一位を獲得することはほとんど疑いようがない」(ibid.)。技術の影響力がこのように拡大するにともなって、そのころ、さまざまな技術についての議論があった。カッシーラーはこの論

文で丹念に先行文献にあたっている。そのなかには、技術を慨嘆するもの(たとえばジンメル)も、礼賛するものもあった。後者の代表が、『技術の哲学』という表題を付した著書(1914, 1927)をあいついで出版したエーベルハルト・チンマーやフリードリッヒ・デッサウアーなどである。かれらはもともと技術畑の専門家であり、たとえば、「技術の原産地は……理念のうちにひそんでいる」(C17, 143)というデッサウアーの言葉に見られるように、プラトニズムにつらなるきわめて理想主義的な「技術の哲学」を説いていた。

このような同時代の〈技術哲学〉に敏感に反応しつつ、カッシーラーはそれをさらに哲学的に厳密に基礎づけようとする。いいかえれば、当時のそうしたころみにもかかわらず、「技術は哲学的自己省察というこの圏域にまだほんとうには組み込まれていない。技術は依然として独自の周縁的性格をもち続けているように思われる」(C17, 141)。技術知は哲学的伝統においても周縁的地位をあてがわれていたのであって、現代の哲学も「技術の精神的《本質》への洞察」(ibid.)をまだなしとげていない。かれはこの点に時代の混迷の一因を読み取っているのだが、それでは、かれ自身は技術をどのような立脚点から把握しようとするのか? 「技術についての本来的判断はただ技術それ自身から、ただ技術にそもそもそなわっている内在的法則についての洞察からのみ獲得することができる。技術の哲学なるものは、少なくとも、こうした要請にむすびついている」(C17, 147)とするなら、かれのめざす〈技術の哲学〉はどのようなものでなければならなかったか?

すでに『シンボル形式の哲学』第2巻(1925)において、カッシーラーは上記カップの有名な「器官投射説」³⁾にふれて、こう述べていた。「技術の哲学は、人間がそれによって外界にその特定の形態と特性とを与える直接的または間接的な感性的一身体的諸器官と関係するのであるが、シンボル形式の哲学はその問いを精神の表現機能の全体へと向けるのである。この哲学はそうした表現機能のうちにも、存在の複製や複写をではなく、形態化のもろもろの方向や様式を見る。つまり、支配の《器官》をではなく《意味付与》のそれを見る」

(C12, 255). 明らかに、ここでカッシーラーはカント的な構成主義とむすびついている。人間の精神は存在をたんに模写しているのではなく、自らが能動的に産出するさまざまな〈形式〉〈シンボル形式〉によって世界の〈意味〉を理解している。

技術はこの立場から把握されているのであり、「哲学は——理論的認識や言語や芸術の《可能性の条件》を問うのと同様に——技術的活動や技術的形態化の《可能性の条件》を問うのでなければならないだろう。哲学はここでも、意味の問いを根本から説明したあとではじめて、存在の問いと権利の問いを立てることができるだろう」(C17, 142). 存在に先立つこの〈意味〉を付与するものこそ〈形式〉である。技術も、精神の根源的な形態化活動の特定の様式にほかならず、それゆえ「あらゆる技術は、精神の所産である」(C17, 164). したがって「求められているのは、精神生活の全体にたいする技術の関係、すなわち精神生活の全体性と普遍性とにたいする技術の関係である。しかしこの関係は、自然科学の存在概念ではなく、むしろ形式概念を中心に据え、この概念の根拠と根源、この概念の内容と意味に立ち戻って省察することによってのみ、見いだされ確認されるのである」(C17, 145).

そこで、カッシーラーはおもに体系的な関心から、世界理解の諸形式としてのさまざまなシンボル形式を、それら相互の関係から解明していく。言葉と道具、呪術 [= 神話] と技術、技術と芸術、といった諸問題が縷説されているのであるが、ここでその詳細を検討するいとまはない。かれの所説の特徴のみを、おおづかみにとらえておきたい。かれは技術を祝いも呪いもしない。それをつとめて理解しようとする。「精神は、たとえ自分がその影響下にある力を回避することも征服することもできないとしても、まさにこの力を認識し、この力をそれがそうであるとおりのものとして見ることを要求する」(C17, 139). つまりカッシーラーのめざす〈技術哲学〉の特質は、なによりも、可視性を付与する形式を手がかりにして〈見る〉こと、「技術が何であるかについて直観すること」(C17, 147)にある。ハイデッガー同様、カッシーラーの技術哲学においても「技術の本質について問われねばならない」

(C17, 148)とされるのだが、それはあくまで〈見る〉という基本姿勢によってつらぬかれていたといえるだろう。じっさい、かれは種々のものを見分ける鋭敏な目をもっていた。しかし、〈見る〉という理論的態度の優位は、結局、技術をそれにふさわしい仕方であつかうことをさまたげたのではないだろうか？

とりわけこうした疑念がわきおくるのは当該論文の末尾においてである。そこでは、技術と倫理との関係が論じられており、現代文化の中心問題として「技術の倫理化(Ethisierung)」(C17, 182)について論及されている。このこと自体は卓見である。「技術がまず第一に問題にするのは、存在しているものではなくて、存在しうるものである」(C17, 176)とすれば、この可能性にどこかで限界が設定されねばならないだろう。いうまでもなく、巨大化した技術をいかにコントロールすべきかという問題に、今日のわれわれは直面している。この問題にカッシーラーはただちにこう答える。すなわち、「技術はいつでも奉仕者となることができるだけであり、指導者にはなりえない。技術は、諸目標の成就に参加できるし参加すべきであるとしても、諸目標を自分から立てることはできない」(C17, 182). また、「技術は《奉仕の思想》の支配下にあり、最終的には全体は1人のために1人は全体のために働くという労働の連帯性という理想の支配下にある」(C17, 182f.). この発言は、技術をたんなる手段とみなす、今では陳腐となった技術観から、そんなにへだたっていないのではないか？ カッシーラーの立場においても、精神の所産としての技術は精神生活全体のうちでそもそも周縁的な位置しか占めていなかったのではないか？

カッシーラーはハイデッガーの『カントと形而上学の問題』にたいする書評のなかで、その著書におけるカント解釈が一面的であることを批判して、つぎのように論じた。すなわち、「かれ [= カント] の問題は《存在》と《時間》という問題ではなく、《存在》と《当為》、すなわち《経験》と《理念》という問題である」(C17, 239). この指摘は、道徳哲学をも含んだカント哲学の全体を視野に入れた正当な論評であると考えるが、そのことによって同時に、カッシーラー当

人の問題意識もきわめて鮮明に露見している。この哲学からすれば、「技術に方向を指し示し、技術のうちに最後に出現すべく任ぜられているのは、自由それ自身の理念である」(C17, 173)。技術は啓蒙主義以来の歴史哲学の理念に包摂されているかのようだ。かれの技術論がデッサウアーなどの同時代の理想主義的な「技術の哲学」にしばしば言及するのも、しごく当然のことといえよう。

2. 三木清の『技術哲学』

三木は1938年に『構想力の論理』第3章「技術」を書き上げ、1941年に『技術哲学』を発表した。だが、三木独自の「新しい技術哲学の樹立」(M7, 301)構想は、「技術学の理念」(1936)と題された小論にうかがうことができる。その基本的な主張を列挙するなら、「一般的にいうと、技術は行為の形である」(M7, 306)。「技術はもと主観的・客観的なものである」(M7, 307)。「技術は因果論と目的論との統一であると考えることができる」(M7, 310)。「現在技術の統制或いは計画化といわれるものは、社会技術、とりわけ政治の自然科学的技術に対する支配を意味している」(M7, 312)。「技術は物を作る行為として歴史的である。歴史はすべて技術的に作られてゆく」(M7, 314)。ここで三木の〈技術哲学〉を構成する諸要素のほとんどすべてが登場している。以上の諸点を、われわれは主として『技術哲学』によりながらたどっていくことにしよう。

技術とは、三木の本質規定によれば、〈行為の形〉である。われわれの行為は主体と環境とのあいだで成立するのだが、「主体と環境、主観的なものと客観的なものとを媒介するということが技術の本質に属している」(M7, 202)。こうした技術の媒介的性格をあらわしたものが道具であり、「技術は元來行為の形であるが、その中にはつねに道具が含まれている」(M7, 202)。しかしこのことは、われわれが道具を使って環境をたんに作りかえるということを意味するのではない。というのも、「技術は人間の内在的・超越的本質に基いている。我々の行為は主体的に規定されると共に環境的に規定され、単に客観的なものでないと同様、単に

主観的なものでなく、元來主観的・客観的なものであって、主観的・客観的な行為は弁証法的なものとして媒介的であり、従って技術的である」(M7, 210f.)。

「技術論論争」としてよく知られているが、当時の日本の論壇には、技術を生産手段とみなす見方があった。技術についてのこうした客観的な見方を三木はそれだけでは不十分なものとしてしりぞける。「実際、もし技術が単なる手段であるとする、技術哲学という如きものは存在し得ないであろう」(M7, 303)。なぜなら、「目的は技術のイデーである」(M6, 217)からであり、これらの全体を技術哲学はとらえる必要があるからである。したがって、「技術は因果論と目的論との統一である。機械のメカニズムといわれるものも単なる因果論ではなく、因果論と目的論との統一である。この統一は形において与えられる。……技術は行為の形として全体的規定を得るのである」(M7, 218)。

主体と環境、主観的なものと客観的なもの、因果論と目的論、これらを統合するものが、三木のいう〈形〉である。さらに『構想力の論理』では、「形はもとより単なる物質ではなく、物質と精神との、パトス的なものとロゴス的なものとの統一である」(M8, 232)という、〈構想力〉の視点が提供されている。技術は形を生み出す構想力の所産にほかならず、「技術とはパトスとロゴスとを統一するものである」(M8, 249)。ここまで見てくると、前節のカッシーラーとの類似性が顕著であると考えられるかもしれない。というのは、〈シンボル形式〉というかれの哲学的出発点は、「感性的・個別的なものが……純粹に精神的な意味の担い手となりうる」(C11, 39)ということだからである。ところが、管見では、この二人の直接的な影響関係はないようだ。むしろ三木はハイデッガーからこの点を学んだ⁴⁾。

三木はこう告白している。「合理的なもの、ロゴス的なものに心を寄せながらも、主観性、内面性、パトス的なものは私にとってつねに避け難い問題であった」(M8, 4)。ロゴスに先立つパトス、内面的・主体的なものに着目すること、これが三木の全著作に通底する根本的な発想であり、それが得られたのは留学中のことだった。1924年5月14日付けの森五郎〔のちの

羽仁五郎]宛の手紙で、つぎのように述べられている。すなわち、「私達は概念を破壊してこの *Grunderfahrung* を掴まねばならぬ。従て *Interpretation* は *Destruktion* であるとも云い得る。この根本経験を自ら捉えるとき、この根本経験を言葉で現わす *Möglichkeiten* を見定めることが出来る」(M19, 269)。そして帰国後、論文「人間学のマルクスの形態」(1927)において、「日常の経験がロゴスによって支配されているのに反して、基礎経験はロゴスに指導されることなく、却てみずからロゴスを指導し、要求し、生産する経験である」(M3, 5)、と記される。

しかし、ハイデッガー哲学の地盤のうえでマルクスまで論じてしまうことに——このことが文字どおり三木の命取りになったとも考えられるのだが——、三木とハイデッガーとの相違点、三木の三木らしさがあった。このことを端的にしめす概念が〈行為〉であり、『歴史哲学』(1932)ではハイデッガーがこう批判されている。「最初に行為がある。事実はハイデッガーのいう人間に於ける現存在よりも一層根源的なものであり、この現存在を規定し、現存在の有限性なるものもそれによって初めて可能になる。存在理解の仕方は、行為によって規定されるのである」(M6, 234)。もちろん、「存在論的とは主体的な存在理解ということである」(M6, 232)と注釈する三木のハイデッガー理解のかたより、すなわち人間学に編入しうるハイデッガーしか理解しえないということは、今日のわれわれからすれば容易に批判できる点なのだが、それはさておき、三木のめざす哲学はなにより〈行為〉の哲学だった。以上のような背景のもとに、「技術の本質を捉えるためには行為というものから考えてゆかねばならぬ」(M7, 197)、という『技術哲学』初頁の文章は読まれねばならないのだった。

この〈行為〉という立脚点において、はじめて歴史と技術とがむすびつく。つまり、「人間は環境から作られたものでありながら独立なものとして逆に環境を作つてゆく。このように形成的なものとして我々の行為は歴史的である。歴史的行為は技術的である」(M7, 211)。また、行為がつねに社会的であるかぎり、「技術の社会性」(M7, 264)が着目されるのは必然的なあゆ

みといえよう。三木は技術概念を拡張しつつ、つぎのようにいう。「我々の環境であるのは自然のみではなく、社会も環境である。自然に対する技術があるように、社会に対する技術がある。自然技術に対して社会技術 *Sozialtechnik* 即ち政治の如きものが存在している」(M7, 208)。この場合の〈政治〉についてさらに説明しておけば、「諸技術を総企画的に支配するものはそれ自身一つの技術であり、政治はかくの如き技術である」(M7, 222)。この〈社会技術〉の提唱は重要であり、われわれはここに三木〈技術哲学〉のもっともユニークな論点を見ることができる。

ある工学倫理の教科書が述べているように、「社会的実験としてのエンジニアリング」⁵⁾という工学技術の把握が正しいとすれば、社会技術の成熟が現代の最重要の課題であるといえるだろう。三木の時代診断によれば、「いわゆる技術的時代の悲劇は、技術は単に自然科学技術のみでなく社会技術というものの存在すること、両者の間には因果的に密接な関係があること、従つて諸技術の間に正しい目的・手段の自律的・依存的関係が樹立されねばならぬことを理解しないところにある」(M7, 282)。

3. ハイデッガーのユンガー論

現代の〈技術哲学〉の提唱者のひとりフィーンバーグは、ハイデッガーを20世紀でもっとも影響力のある技術哲学者として認めはするが、その立場を〈本質主義〉の技術哲学として批判する。本質主義とは、歴史現象を歴史汎通的もしくは固定的な概念構造によって説明する立場であり、抽象によって技術的行為の社会的歴史的次元を逸している、とされる⁶⁾。たしかにハイデッガーは技術の〈本質〉を問う。晩年の対談でかれはこう述べている。「まず最初についておかなければならないことは、わたしは技術に反対していない、ということです。わたしはけっして技術に反対して語ってはいませんし、技術のいわゆる悪魔的なものに反対していませんでした。そうではなくて、わたしは技術の本質を理解しようとしてみているのです」(H16, 706)。このようなハイデッガーの技術論がフィ

ーンバーグの論難するとおりのものかどうか、2004年に出版された『エルンスト・ユンガーについて』（全集90巻）によりながら検証してみたい。

ユンガーの『総動員』（1930）『労働者』（1932）といったエッセイが出版されるやいなや、ハイデッガーはニーチェを継承するユンガーの思想的重要性をただちに認め、かれについての論考を書き残した。この著書は、1934年から40年ごろの——若干の50年代の草稿も含まれているけれども、ほとんどの草稿が前節であつかった三木の諸論文と同時期であると考えてよい——そうしたユンガー関連文書の集成である。したがって、ハイデッガーの思惟の全行程のなかでは、この書は『哲学への寄与論稿』（1936-38）に代表される後期ハイデッガーの存在歴史的思惟に所属している。本研究がとりわけこの著作に注目するのは、もちろんここで〈技術〉について論及されているからであり、この書によって「ブレーメン講演」（1949）や「技術への問い」（1955）へと結実するハイデッガー技術哲学をその生成過程から解明できると期待するからである。

この著作の付録に、ハイデッガーによる『労働者』の手沢本がその欄外注記も含めて再現されている。そこには、「技術とは、労働者という形態が世界を動員する、その様式である」（H90, 376）、また、「全体的な労働性格とは、労働者という形態が世界を貫徹しはじめる、その様式である」（H90, 363）〔下線ハイデッガー〕、とある。そして後者に、「なんとこれは、ほとんど正確に《技術》の定義だ」（H90, 363）という注記がなされている。第一次世界大戦の英雄ユンガーは凄惨きわまりない戦場から何度も負傷をおいながら生還したのだが、「かれにとって近代的な戦争技術の投入は市民道徳の矛盾を論証するものだった」⁷⁾。そして、技術という苛烈な現実に応答する新たな人間〈形態〉こそ、〈労働者〉にほかならなかった。すなわち「労働者という形態が、人間的または世界的な用象(Bestand)にたいする無制約的かつ惑星的な支配者である」（H90, 165）。いいかえれば、「労働者という形態のうちで人間存在という主観性が達成するのは、自らが無制約的なものへと完成し惑星的なものへと拡大することである」（H90, 40）。

ハイデッガーは、労働者という形態が世界を動員する様式としての技術、というユンガーの技術理解の根底に、西洋形而上学を貫通する「形態というプラトンの形而上学」（H90, 167）、さらには近代以降の「無制約的な主観性」（H90, 168）を読み取った。「近代的には、労働の本質は技術という形而上学的本質から規定されている」（H90, 109）のであって、「主観—客観関係という本質的な関与が《技術》である。技術とは動員の仕方ではなく、真理という根拠（すなわち労働者と労働ということの存在可能性）である」（H90, 80）。ハイデッガーは西洋近代にひそんだある支配的な力を嗅ぎとっており、これこそ「全体における存在者を（人間をも）その制作可能性のうちで計画しつつ—訓練しつつ—計算しつつ確保すること、という意味での技術」（H90, 6）にほかならない。かれはこの意味での技術を〈作為性(Machenschaft)〉——のちに〈組み立て(Ge-stell)〉とも呼ばれる——という概念で把握する。つまり、「あらゆる存在者の無制約的な制作可能性（作為性）」（H90, 174）であり、同時期の別の著書によるなら、「技術とは、存在者それ自体（自然および歴史）を算定可能な制作可能性へと作り立てること(Herstellung)、すなわち制作性を制圧しつつす作為性である」（H66, 173）。

ハイデッガーはユンガーを超えて思惟するけれども、逆に、このことはユンガーを経由して思惟することでもある。この点を確認するだけで、ハイデッガーの技術論を没社会的・没歴史的として特徴づけることがそもそも誤りであることは容易に推測できるだろう。「国家社会主義ドイツ労働者党」という名をあげるまでもなく、〈労働者〉には政治的な含意があった。たとえば、「近代の諸可能性、すなわち個人主義、自由主義、社会主義、ナショナリズム、共産主義、労働者」（H90, 66）と述べられており、「そのつどの国家機構は、民主主義的な、ファシズム的な、ボルシェヴィズム的なそれであれ、またそれらの混合形式であれ、うわべだけのものである」（H90, 231）。これらの政治体制の深層構造にあたると考えられたのが〈技術〉にほかならない。

重要な論点であるから、もっと具体的な論拠をあげ

ておこう。レーニンの「社会主義（すなわち共産主義）とはソヴィエト権力＋電化である」という言葉について、こう評されている。すなわち、「《社会主義》にとって技術の完成とその支配とがすべてである」(H90, 231, vgl. H90, 40, H54, 127, H69, 210)。また、ナチズムの人種概念にたいしても、それが近代哲学の一重種にすぎないことがあばかれている。すなわち、「主観はひとつの惑星的な人間存在、すなわち新たな人種でありうる。人種——ひとつの純粋に主観的な概念」(H90, 67)、「《人種》とは、技術的—主観性適合的な概念」(H90, 99)である。「惑星的に支配する人種の類型論と技術のうちで、人間の主観性は絶対的となる」(H90, 67)。このように見るなら、ある論者もいうように、「ハイデッガーがとくに 1933 年ごろにナチだったということがセンセーショナルなのではない。……むしろセンセーショナルなのは、ハイデッガーが技術哲学的にナチズムから何を学んだかということである」⁸⁾。

こうした政治的次元を思惟するさいに、ユンガーの著作からハイデッガーが支援を受け取ったのはまちがいない。「エルンスト・ユンガーの著作における決定的な点は、その手助けで、本質的かつ歴史的な経験（労働者という形態）によって形態的なものを知へと一般的かつ本質的に高め、そのようにして存在の理—解すなわち存在企投(Seinsentwurf)を、人間存在の根拠としていっしょに経験できるように根拠づけることができるようにする、というところにある」(H90, 76)。ユンガーの歴史的意義が前期ハイデッガーの術語〈存在企投〉によって説明されている。これは「本質企投」(H90, 115)ともいいかえられている。それゆえこの全集 90 巻においてもハイデッガーは「技術の本質」(H90, 159)を問うのだが、三木のように存在者との行為的交渉の立場から問うのではない。あくまで、存在者との交渉を先行的にみちびく存在論的な本質企投の次元で、技術の本質を問うのである⁹⁾。

他方しかし、ハイデッガーが技術の本質を理解しようとするさいに、カッシーラのように形式を産出する人間精神の能動性に依拠するのでもない。むしろ後期ハイデッガーの根本経験とはつぎのようなものであ

る。すなわち、「この思惟がはじめてはじまるのは、人間が存在者の存在の企投のうちに自らを投げ放ち、原存在(Seyn)を問いつつ、自分が問い求めているもの——原存在——によって投げられたものであることを経験する場合である」(H90, 277)。後期ハイデッガーの存在歴史的思惟は企投の〈被投性〉を承認するところで成り立つのであって、「全体における存在者のこの企投は、形而上学の歴史としてまだほとんどこれまで知られていなかった、ある隠蔽された投げ軌道に由来する」(H90, 279)。

最後に、よくある誤解に立ち戻っておきたい。たしかにハイデッガーは技術の〈本質〉を問う。しかしこのことは、〈本質主義〉という言葉でイメージされるように、「ハイデッガーは技術に異なる未来の余地を認めない」¹⁰⁾、ということではけっしてなかった。むしろまったく逆であって、このような伝統的な〈本質〉理解の破壊こそ、かれ自身の本意だった。「われわれが形而上学を原存在の歴史のそれ自身のうちで閉じられた時代として把握するなら、われわれはすでに……この歴史のある別の《エポック》のなかに立っている」(H90, 281)。つまり、「原存在の開蔽(Entbergung)は全体における存在者の変貌となる」(H90, 281)であり、「作為性という極限的な存在忘却」(H90, 78)が変転する将来的可能性をハイデッガーは一貫して模索していた。いうまでもなく、技術の本質の変貌は、かれの重要な概念的区別によるなら、技術の否定でもなければ、ディストピアでもない。

おわりに

西洋の大学制度において、技術は、19 世紀後半に遅れてやってきた得体の知れない新参者だった。だから技術がすぐに受け入れられたのは、伝統的な諸学問が健在な西洋よりも後進国日本であって、世界で最初の工学部をもった総合大学は東京帝国大学だった（1886 年）。こうしたことから、技術が 20 世紀初頭の哲学者にとってひとときわ挑発的な問題でありえた、その時代的背景が推測できるだろう。

カッシーラは当時のヨーロッパ最高の知性の持ち

主だったが、かれはこの新現象をとにかく〈見る〉ことにつとめた。われわれのたどったところでは、カッシーラーの哲学的立場は技術をきわめて高く評価しているように見えて、じつは技術を技術として尊重していないのだった。技術はたんなる手段として伝統的な諸学問に従属していた。これにたいして、三木なら、こういったことだろう。「技術の独自性を認めないものが技術を真に尊重することができないのは当然である」(M7, 304)。三木は〈行為〉の立場から技術概念を拡張し、「技術を馴らし得るものは技術である」(M7, 282)とし、社会技術 [= 政治] による技術の馴致を説いた。今日のわれわれのなかには、三木の主張のうちに〈技術哲学の可能性〉を看取するひとも多いことだろう。ところが、ハイデッガーなら三木にこう反論したのではないだろうか？ 三木のいうような社会技術の支配は、自分の直面していたナチ国家の現実そのものだった、と。三木のそれをふくめて、「技術にかんする《諸哲学》は、あたかも《技術》と《人間》とがそれ自体で物在する二つの《量》や物であるかのよう」にふるまっている」(H54, 128)、と。

現代の若者はケータイをつねに利用している。メールが届くと即レスする。ハイデッガーはタイプライターという道具においてさえ、「手の、文字への、すなわち語への、すなわち存在の非隠蔽性への、タイプライターによって変貌した近代的な関与」(H54, 126)を読み取ることができたが、現代のケータイにおいてもなにかが生起しているはずだ。このことを哲学的に語ることは非常に困難であるだろう。このようなとき、つぎのハイデッガーの言葉は依然として啓発的であるとわたしには思われる。「われわれは技術への本質的な関与をまだもっていない」¹¹⁾。これはけっして技術にかんするペシミズムではない。技術を操作しようとして、じつは技術によって操作されてしまう、技術の本質にひそむ圧倒的力を、問うにあたいするものとして尊重する思想家の言葉である¹²⁾。ハイデッガーは亡くなる直前においても、「テクノロジーによって刻印された世界文明の時代のなかでは、存在の問いを問うことにとって、存在忘却はある特別な仕方では急迫的である」(H16, 747)と告げており、〈技術の本質〉はか

れにとって終生かわらぬ思惟の事柄でありつづけた¹³⁾。

注

Ernst Cassirer からの引用は Felix Meiner 社による全集版(Hamburger Ausgabe 1998-)から、Martin Heidegger からの引用は Vittorio Klostermann 社による全集版(1975-)からのものとし、それぞれ C と H のあとに巻数とページ数を記し、本文中に挿入した。また、三木清からの引用は、『三木清全集』(岩波書店, 1984-1986)からのものとし、M のあとに巻数とページ数を記した。なお、三木からの引用にさいして、旧漢字と旧仮名遣いは新しいものにあらためた。

なお、本稿は、平成 19 年度～21 年度科学研究費補助金の基盤研究(C)として採択された筆者の単独研究「技術哲学の新歴史主義的研究——カッシーラー・三木・ハイデッガーの 1930 年代——」に関連する、研究成果の一部である。

参 考 文 献

- 1) Hans Jonas, *Technik, Medizin und Ethik. Zur Praxis des Prinzips Verantwortung*, Insel Verlag, Frankfurt am Main 1985, S.15.
- 2) Karl Jaspers, *Die geistige Situation der Zeit*, Walter de Gruyter, Berlin-New York 1999 (1932 bearb. 5. Aufl.), S.41. なお、ヤスパーズのこの記述についてのハイデッガーと三木のコメントとして、H48, 14 および M7, 274f.を参照せよ。
- 3) この学説はあらゆる原始的道具が身体器官の働きの拡張であることを意味している。カッシーラーはこの説に深い哲学的意義を認め、人間は外部の人工物という迂路をとおして自分の身体についての自己知にはじめて達すると主張する(C12, 253f., C17, 167f.)。とすれば、カッシーラーは『存在と時間』における〈道具〉分析にきわめて近い地点に立っていたことになる。もう一点、技術史の事項を補足しておく、現代の機械技術はこの学説では理解できない。飛行機が翼の羽ばたきといった自然の模倣から自由であるように、カール・マルクスのいう「有機体的な限界からの解放」(C17, 169)が、現代技術の基本法則であるとされる。

- 4) 三木と西田幾多郎との思想的関係については、つぎの文献を参照のこと。秋富克哉「第二章 技術思想——西田幾多郎と三木清」、『京都学派の思想』（大橋良介編，人文書院，2004年），158-176 ページ。
- 5) Roland Schinzinger, Mike W. Martin, *Introduction to engineering ethics*, McGraw-Hill's BEST, 2000, pp. 71-105.
- 6) アンドリュウ・フィーンバーク『技術への問い』（直江清隆訳，岩波書店，2004年），23, 24, 267, 329 ページ参照。
- 7) Konrad Otto, Technik und Ethik, in: *Angewandte Ethik, Die Bereichsethiken und ihre theoretische Fundierung. Ein Handbuch*, Stuttgart: Kröner 1996, S. 666.
- 8) Reiner Maurer, Das eigentlich Anstößige an Heideggers Technikphilosophie, in: *Heidegger: Technik—Ethik—Politik*, Würzburg: Königshausen und Neumann, 1991, S. 25. さらにこの点について，轟孝夫「技術と国家——ハイデッガー技術論の射程——」，『ハイデッガーの技術論』（加藤尚武編，理想社，2003年）所収，59-143 ページ参照。
- 9) ヒューバート・L・ドレイファスは，「技術の本質（技術的な存在の理解）」と注釈している。Cf. Hubert L. Dreyfus, Heidegger on the connection between nihilism, art, technology, and politics, in: *The Cambridge Companion to Heidegger*, Cambridge University Press 1993, p. 305.
- 10) フィーンバーク，前掲書，24 ページ参照。
- 11) Martin Heidegger, Technik und Kunst—Ge-stell, in: *Kunst und Technik, Gedächtnisschrift zum 100. Geburtstag von Martin Heidegger*, Frankfurt am Main: Klostermann, 1989, S. XIII.
- 12) Vgl. Pascal David, Die Würdigung des Wesens der Technik im Denken Martin Heideggers, in: *Vom Rätsel des Begriffs: Festschrift für Friedrich-Wilhelm v. Herrmann zum 65. Geburtstag*, Berlin: Duncker und Humblot, 1999, S.91-100.
- 13) 筆者はかつてこの事柄を〈有限性〉に見さだめて，ハイデッガー哲学の全体に解釈をほどこしたことがある。これについては，拙著『存在の問いと有限性——ハイデッガー哲学のトポロギイ的究明——』（晃洋書房，2006年）を参照のこと。

